

渥美かをる・奥村三雄編著『平家正節の研究』

添田，建治郎
山口大学人文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/12067>

出版情報：語文研究. 50, pp.52-53, 1980-12-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

渥美かをる 奥村三雄 編著 『平家正節の研究』

添田建治郎

『平家正節の研究』は、渥美かをる、奥村三雄両氏の編著になるものである。本書は、尾崎家本『平家正節』を中心とした考察を課題とし、平曲研究にたずさわる五氏各一篇の多彩な論文を収める。

まず巻頭では、金田一春彦氏の「曲節「呂」の基音の考」が、平曲中の一曲節へ呂の基音、つまり、曲節へ呂の旋律が、固有の高さの音を中心にも上ったり下ったりする、その基本的な音の高さについて考究する。平曲の一詞章「間」の構成・設定の仕方を考察した、高橋貞一氏の「平曲の間物について」に続いては、山下宏明氏が、「平曲研究の基礎的一課題—平家正節の「墨譜」—」と題して、平曲諸本と『平家正節』それぞれの、本文・墨譜を比較対応させて、平曲諸本の墨譜の有りよう、墨譜整理の流れ・方向について論ずる。また、渥美かをる氏は、「平家正節」が、平曲諸本の中で、とりわけ前田流の「平語」と豊川検校本を経てどのように改訂・作成されたのか、その具体的な姿を、詞章と譜面の両面から解明して『尾崎家本平家正節』の研究をまとめられた。その第三章には、氏の前著『平家正節』下巻（西四九九年大學書店）での「萩野検校伝」を補った「萩野検校伝 補遺」があり、付録として、館山甲午氏藏の「萩

野宗匠秘伝」を添える。第五番目の論文が、奥村三雄氏の、平曲諸本の譜記・旋律と、それに反映したアクセントの関係を考察しようとした「平家正節の国語学的研究—譜記に反映したアクセントを中心に—」である。

本編では、この奥村氏の論文を中心に紹介の筆を進めてゆきたいと思う。奥村論文の体裁は、

- 一 平曲譜本の研究
 - 一一 中心資料としての尾崎家本平家正節
 - 一二 平曲の旋律と譜本
- 二 平曲譜本に反映したアクセント—品詞別拍数別アクセント型分類と所属語集—一覧
 - 二一 作業の問題点をめぐって
- 三 譜記の解釈
 - 三一 譜記と彌備の問題
 - 三二 アクセント型と所属語の問題
- 四 資料編—一・二・三拍名詞のアクセント型分類語彙と譜記例—一覧
 - 四一 表の説明

となっている。まず注目されるのは、二に、尾崎家本の「平家正節」を中心として、平曲諸譜本の譜記からの帰納によって推定されるところの、近世京都語の語アクセントの体系を、自立語の名詞・動詞

・形容詞、付属語の助詞・助動詞について、品詞別拍数別に整理し、各アクセント型に所属する語彙を掲げておられることである。

同論文末尾の「資料編」には、この中の一、二、三拍の名詞について、具体的な譜記例を一覧表にして列挙し、前記語彙表の拠り所を示すとともに、アクセント資料としての利用者の便宜をはかっている。この奥村論文は、近世京都語アクセントの全般的な姿を明らかにし、同期の京都語アクセントについて語るための、資料的な充実に貢献するところ大といふべきである。三の所謂「研究編」では、

譜記と旋律・アクセントの関係、譜記と調価の相関(アクセントを不完全に反映しているような譜記についての吟味)、アクセント型と所属語の問題などについて言及し、「平家正節」(平曲譜本)のもつアクセント資料としての意義、アクセント史研究へ寄与する側面、アクセント資料としての限界、その限界克服の方法、つまり、譜記例の不足やアクセントを不完全に反映した譜記のみられる状況の中で、平曲譜本のアクセント資料としての価値を、質・量ともに高めるための方法など、平曲譜本に反映しているアクセントをめぐるの、多岐にわたる問題を具体的に考究する。この中、アクセント史研究に寄与すべき事例として、

- (1) 一拍名詞(巳)類、二拍名詞(酉)類の第二拍目、それに、動詞の(為)類、(来)類、(着ル)類、(見ル)類の各連用形、(取ル)類、(受ク)類の各連用形、の第二拍目、(来)類、(見ル)類の各已然形第二拍目、(取ク)類の命令形第二拍目などの語末(単独語形)には、下降調のグライド拍が存する。

(2) (1)でも、付属語の下接する場合は、平曲譜本の中に(●)●の新しい変化の動きをみる事ができる。

などの指摘がある。その他、アクセント型分類語彙表中の指摘を、二拍名詞からだけ拾ってみても、「上」のアクセントは、限られた

場合(その上)以外は●○と認めるべきこと、「先」^{サキ}、「程」^{ハジ}も●○▽が多い。概ね、川ノ類は●○▽、山ノ類は●●▽(●●▽)型をとる。「もと(故)」のアクセントも、「本・元」^{モト}等の意の場合には●○で、「許」^{モト}の意になると○●型をとって相違がみられるのではないが、非日常語「母」のアクセントは●●▽が多いものの、一部に揺れがみられること、「夜」は●●▽に行われており、四類所属語と考えるべきか、など貴重な問題提起には枚挙のいとまがない。

奥村論文は、アクセント史研究の立場からは、平曲譜本という、近世京都語アクセントについての話を伴った、「質量ともに極めて豊富な」アクセント資料を提供するとともに、その資料的意義を懇切具体的に解明した学界待望の論文といふべきである。氏の、これと同一の課題を論じた、「国語と国文学」(四九巻二〇号)、「文学研究」(六九巻・七二巻)「語文研究」(三九・四〇号)、「平曲正節」(昭四六年臨川書店)、「国語史論集」(昭五一年表瑠社)所収の諸論文では、その他に、近世期の京都語アクセントの型の体系(活用形のアクセント)を示し、国語音韻資料としての意義についても広く言及しておられる、併読をおすすめしたい。

本書は、「平家正節」の研究編である。出版期日との関連で掲載のならなかった論文もおおるやに聞く、本書での研究も含めて、平曲をめぐる研究の一層の進展を願つてやまない。本文編は、すでに昭和四十九年に平家正節刊行会から、渥美かをる氏の解説を添えて「平家正節」上・下二巻(公学堂書店)として世に出ている。本企画のなかめであった渥美氏を失い、もとより相当の困難は予想されるところであるが、音韻・アクセント研究の立場にとどまらず、各方面各分野からの期待をもこめて、三部作の残る一編、索引編の刊行が心待ちにされるのである。(昭和五十五年公学堂書店 二一、〇〇〇円)